われもこう 第42号

2021年 5月 9日 発行

軽井沢と新型コロナウイルス感染症

われもこうの会は「野の花の居場所作り」のための活動をしています。しかしその内実は忍耐のいる草むしり作業であり、作業後の短い「お茶」に過ぎません。それにも係わらずこの「コロナ」禍（「コロナ」は新型コロナウイルス感染症の意味で用います。）にあって、作業への参加者はかえって増えました。多くのサークルは、活動を抑えざるを得なかったにもかかわらず・・・。野外の活動ですから感染リスクが低く、たまの交流の場であり、共に汗を流す喜びがあるからでしょう。

東京に出て行くと、軽井沢人は「コロナ」感染の恐怖を感じ、早く軽井沢に戻りたいと思うのではないでしょうか。しかし軽井沢は「田舎」だから安全でしょうか？　軽井沢は東京圏との往き来も多く、また都会的な面もあります。本当のところ、どうなのでしょう。また「コロナ」は大きな災厄をもたらす一方、人びとの脱東京、地方移住が進むという好ましい流れが現われているという話がありますが、どうなのでしょう。以下、これらを考えてみます。

軽井沢と新型コロナウイルス感染症　・・・p.1

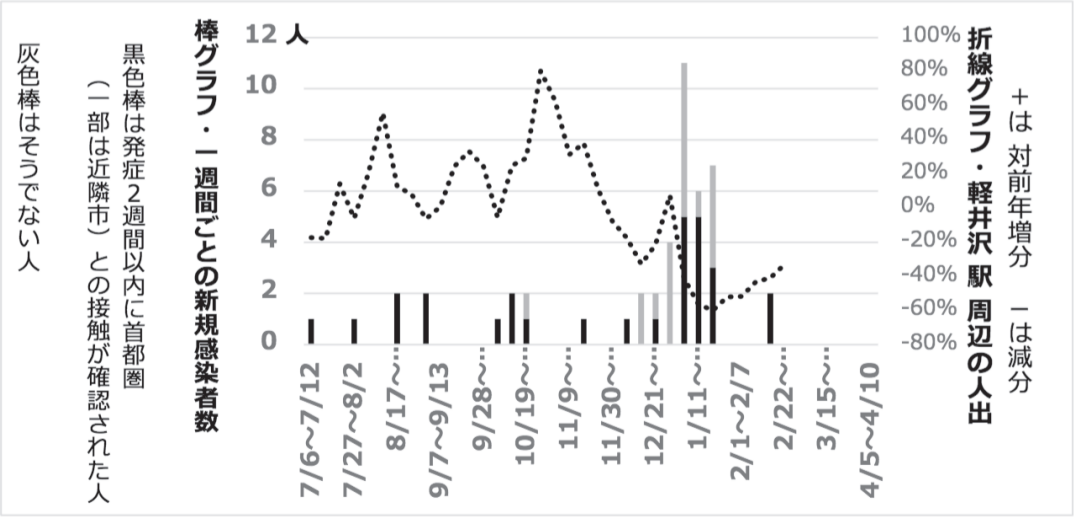
我が家のハナヒョウタンボク物語・・・p.4

植物染料賦　**茜 草**　たかの きみこ・・・p.6

会員の声・・・p.6

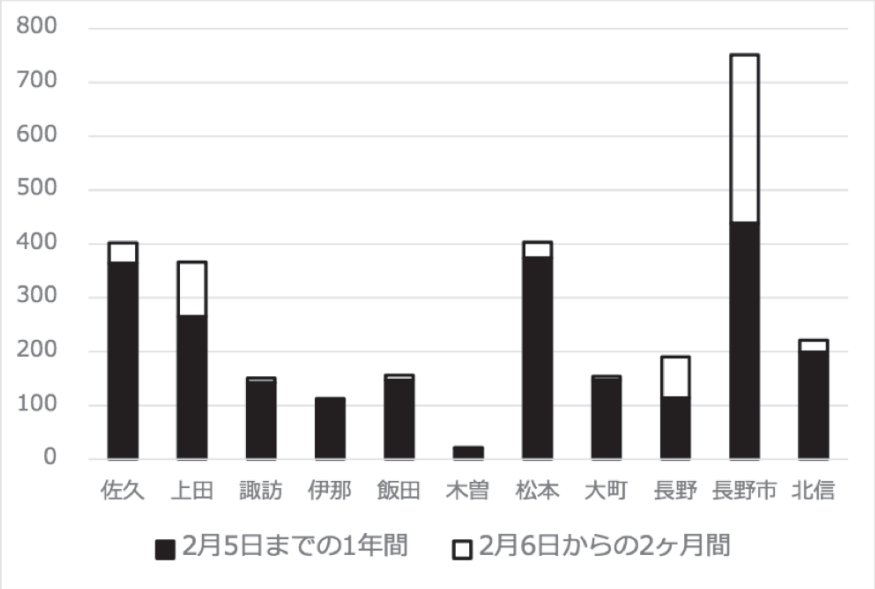
軽井沢の「コロナ」

グラフ1の中の棒グラフは軽井沢における1週間ごとの感染者の人数です。これより軽井沢では一般に次のことがいえそうです。①一旦感染者が発生しても、直ぐ抑えこまれ、②数週間は発生がゼロとなり、③再び発生する、④そして感染は必ず首都圏（一部近隣市を含む）との接触が確認された人から始まる。ただし12月～1月にかけては連続的に発生しており、しかも人口換算では東京都とほぼ同等の感染者数でした。なおこの原稿を書いているのは4月6日ですが、この時点では、2月26日以来、1ヶ月以上、新規感染者はゼロが続いています。



グラフ１　軽井沢における１週間ごとの「コロナ」の発生状況と人出

新聞・テレビなどでは長野市や松本市の感染が多く報じられるので、佐久地域ではそれより少ないと受けとられがちです。グラフ2は、県内各保健所管内の10万人あたりの感染者数の累計を表しています。長野県で感染者が初めて公式に認められたのは昨年2月の下旬でしたから、今年の2月5日でほぼ1年が経過しました。その1年間では、佐久は松本、長野市とほとんど同じ感染者数であることがわかります。なお2月6日からの2ヶ月では、長野市、次いで長野市以外の長野保健所管内や上田で感染者が急増しましたが、佐久はかなり抑えられています。いずれにせよ、佐久地域も県内で感染者が決して少ないわけではありません。また地域内の感染者が一旦、あるレベルを越えると、長野市のように爆発的な急増を見ることもわかります。軽井沢も油断してはいけないというサインなのでしょう。



グラフ２　長野県内各保健所管内の 10 万人あたり感染者累計

グラフ1の折線グラフは、携帯電話の通話記録からみた軽井沢駅前付近における人出の対前年の増減です。昨秋には、何と平年の約1.5倍の人出があったのですが、多くの方は自家用車で来られ、アウトレットもなるべくウィンドウショッピングで済まし、飲食もなるべく避け、入る際は込み入ったところを避けたのでしょう、グラフから感染者増にはつながらなかったことがわかります。軽井沢の場合、感染源は観光客ではなく、濃厚接触を招きやすい首都圏などと往き来のある住民やその親戚、別荘人などのようです。

今後の人口、住宅数、別荘数

「コロナ」によって東京から地方に人口の流出が起こっていると伝えられます。軽井沢でも不動産取引が近来にない活況を呈しており、低い予算で直ぐに使用可能な中古や賃貸物件へのニーズが高く、また値上がり期待から売主が仲介依頼を取り下げるなどで、これら物件が極端に減っているとのことです。軽井沢町の住民登録人口の増加を見てみましょう。グラフ3によれば、人口は2020年から伸びが加速していることが明瞭です。しかし世帯数は「コロナ」ゆえの増加は認められません。また新築の際に必要な手続きである「建築確認申請」もこの10年の間、一貫して400件前後であり、「コロナ」による増加は認められません。むしろリーマンショック以前つまり2008年以前の10年間の方が一時は700件に近づくなど多かったのです。中古別荘の需要が高まっているのは事実でしょうが、少なくとも現在の段階では「コロナ」によって新築は増えてはいません。「コロナ」だからといって生活の本拠を直ちに移すことは容易でないということでしょう。先の人口増について、軽井沢町は、軽井沢の所帯が首都圏などに住んでいた老親や子供を吸収しているためと見ているようです。つまり「コロナ」によって世帯数は変らないが、世帯構成人数が増えているということです。

グラフ3　軽井沢町における2008年以来の人口、世帯数の変化

良き社会への期待

森が火災や台風で破壊されると、跡地から日照を得た草花が咲き誇るようになります。当会が行っているような、強い草木あるいは外来の草木が勢いを増す草原を手入することによって同じ事が起こります。生態系の攪乱は禍（わざわい）をも福をももたらすのです。「コロナ」もこれだけの災厄をもたらしているのですから、良き社会への転換点になってほしいものです。

【注】本稿は長野県庁、軽井沢町や内閣府が2021年4月までにネットで公開しているデータを基に考察したものです。（文責 会報誌「われもこう」編集室）

我が家のハナヒョウタンボク物語

Lonicera Maackii

H. Y. & H. Y.

「ハナヒョウタンボク」という木を知ったのは今から15年位前２００５年の事です。当時東雲交差点の近くにあった「小さな美術館、草花館」で故石川功一画伯の素晴らしい「レンゲショウマ」の絵画を鑑賞した折り、丁度８月中旬で満開だった我が家のレンゲショウマの写真をお見せしました。

すると画伯は「こんなに沢山のレンゲショウマが咲いているのは何処にお住まいですか」と聞かれたので住所を書いて帰りましたら閉館後即、我が家においで下さいました。

レンゲショウマにもびっくりされましたが帰りがけに入口近くにあった皮のむけた木の幹を見て「これはハナヒョウタンボクだと思います。６月10日頃に咲く白い花と10月10日頃に真っ赤な実が付くか確かめると良いですよ」と教えて下さいました。

10月10日頃別荘に来られるか未定でしたので当時植物園の園長でいらした佐藤先生の所へ葉の付いた小枝を持って行きましたら「間違いなくこれはハナヒョウタンボクです。実物を見せて下さい」と言われ、その足で拙宅までお連れしました。我が家に着くや否や、「こんなに太いハナヒョウタンボクは大変珍しく貴重なものです。まるで電信柱のようですね」と言われ幹周りと根回りを計測されておられました。

当時その木は我が家の駐車場の中にあり、周りは砕石で固められていました。先生から「これでは木が可哀そうだから少なくても葉が茂っている幅くらいは土にしてやってほしい」とのアドバイスを受けました。そこで早速砕石を入れて駐車場を造った業者にその旨を伝え、40センチほど掘り返して砕石を取り除き、新たに土を入れる工事をしてもらい、現在の姿にした次第です。その時先生が軽井沢でハナヒョウタンボクを見つけるまでの苦労話やハナヒョウタンボクに関係する話を聞かせて下さいました。（次ページ囲み記事参照）

我が家のハナヒョウタンボクは軽井沢、いや日本国内においても大変貴重な存在であることを佐藤先生より聞いてから私共のハナヒョウタンボクに対する見方・考え方がガラリと変わりました。佐藤先生がお亡くなりになった後も常に自宅近辺に生息しているハナヒョウタンボクに注目しておりました。

そんな中、空き地になっていた自宅の隣接地に別荘が建設されることになりました。今から十年近く前の事です。低木で覆われていた土地の整地が始まり何気なく見ておりました処、数輪の花をつけていたハナヒョウタンボクが切られているのを偶然にも目撃しました。そこで作業員に「この木はハナヒョウタンボクと言って氷河時代から生き延びてきた木で、日本がその昔大陸続きであったことを証明する大変貴重な木で絶滅危惧種に指定されている木ですよ。ここにはまだ数本あるので、今すぐ軽井沢植物園の新井園長に来てもらって、どの木がハナヒョウタンボクか見極めてもらってほしい」と言い、作業員を植物園に行かせて新井先生を連れてきてもらいま

した。先生は数本あるハナヒョウタンボクに印をつけて絶対に伐採しないよう業者に依頼してくれました。そのおかげで一部は移植をし、一部はそのまま切らずに残してくれ、隣地でもハナヒョウタンボクの花を楽しめております。

いろいろなことが分かってくると１９７２年に最初の家を建てる時、植物に興味があり佐藤先生とも交流のあった大工のＡさんが「この木は貴重な木だからこれを避けて家を建てると良い」と助言してくれた事を別荘の管理人さんから聞きました。お陰でいまだにハナヒョウタンボクは健在で６月の花と10月の赤い実を楽しませてくれています。現在の幹周長は根元部122センチ、目の高さ部で101センチ、樹高は６メートル位です。

最近では温暖化の影響でしょうか、開花は５月末日から６月第一週と早くなり、それに伴い結実も早くなっています。また、近年の異常気象のためか花は見事に咲くのですがなかなか結実せず、結実しても赤くなるまでに落ちてしまいます。

絶滅危惧Ⅱ類であり、また氷河期には大陸と日本が陸続きであった証しでもある木が我が家の庭にある事は考えてみると責任も感じますしこれからも大切に見守って行こうと思います。

なお、ネットで「ハナヒョウタンボク　軽井沢・扇平」で検索すると２００６年６月14日撮影の満開になった我が家のハナヒョウタンボクをご覧になれます。脚立に乗ってトラマルハナバチが蜜を吸うために止まるまで長い時間待って撮った写真です。

＜佐藤先生から聞いた話＞

・1855 年：ロシアの植物探索者 Richard Maack がアムール川周辺で標本を採取。学名 (Lonicera maackii) は彼の名前に因みます。
・1905 年：牧野富太郎博士が「ハナヒョウタンボク」と名付けました。
・1937 年：宮代周輔がハナヒョウタンボクを軽井沢で採集しました。
【宮代周輔：神奈川植物誌を編纂、宮代コレクションでは植物の標本を多く収集】
・1955 年：佐藤先生が宮代周輔の標本を手に軽井沢の山中を探し回り、「なかなか見つからないなぁ、くたびれた」と星野温泉のベンチに腰をかけると何と目の前に大きなハナヒョウタンボクの木があったそうです。東京大学の原寛博士によってハナヒョウタンボクと確認されました。これが長倉でのハナヒョウタンボクの発見となりました。
・1960 年 2 月 11 日：長野県の天然記念物に指定されました。

ハナヒョウタンボク

スイカズラ科、スイカズラ属
学名：Lonicera maackii
英名：honeysuckle
• 絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種）
• 長野県天然記念物
• 長野県、岩手県、群馬県、青森県に自生
• 長野県では千ヶ滝温泉周辺、軽井沢町植物園、菅平湿原などで見ることができる
・自生地は山間の湿地、日向
・果実は有毒
• 開花は５月～６月、花色は白色から黄色に変わるのでキンギンボクとも呼ばれる

植物染料賦

茜草

手織作家
たかのきみこ

茜（あかね）という植物をご存知ですか。元々「赤根」と書き、根が赤い色をしています。この根で染めた色が茜色。明日の晴天を予告する夕焼けの色です。実はこの茜、結構自生しているのです。軽井沢にも生えていて、「これは茜です」と教えられた時は「えっ、ほんと?」と思いましたが、どうやら本当のようです。ちなみに東京の赤坂の地名は赤根が群生していたところから付いたとか。

茜は非常に古くから染色に使われていた染料で、正倉院や法隆寺には茜で染めたものと思われる裂（きれ）が残っています。鎌倉時代に作られた緋威（ひおどし）の鎧の緋も茜で染めたものです。しかし今日では茜染は殆ど廃れてしまっています。明治時代に修復の為に同じような色に他の方法で染めたところ、修復した方は褪せてしまったのに元の方はちゃんと残っているそうです。そんな優秀な染料がなぜ廃れてしまったのかわかりません。

そもそも18世紀半ばに化学染料が発明されてから天然染料は衰退の一途を辿り、現在では殆どの染色品は合成染料で染められています。しかし日本茜はそれよりもっと前、室町時代にその利用は途絶えたということです。

その理由の一つは、日本茜の根は非常に細く採取するのが手間な上に赤い色素の含有量がとても少ないことです。同属別種の西洋茜なら日本茜の3分の1の分量で同じ濃さの色に染まります。

鮮やかな赤を出すには色々手間と時間を掛けなければならなかったことも要因と考えられます。徳川吉宗は延喜式に記されている染色の再現を試みましたが、茜染めに関してはうまくいかなかったという記述があります。しかし染色方法が難しかったり手間が掛かったりする染料は他にも沢山あるのに、何故なのでしょう?

赤や紫、緑の色は花や葉で身近にあるのに、いざその色を写そうとするとこれがなかなか難しいのです。基本的に赤い花びらで赤い色は染まりません（緑や紫についてはまたのちの機会に）。日本の場合、赤を染める染料としては紅花（べにばな）もよく知られていますが、やはり赤い色素の含有量が少なく染色方法は大変手間が掛かる上、大変褪せやすいのです。その為、昔から赤い染料は東南アジアなど南方から輸入した物が多く使われていました。そん

会員の声

草花との出会い

小さな頃から植物が好きなこどもでした。千葉の住宅地で生まれ育ち、土地の草花には明るくなかったですが、庭に少しずつ苗を増やしては楽しんでいました。初めて草花を買ったのは小学三年生のとき。オクラホマという真紅のバラで、ビロードのような花びらに惹かれ、なけなしのお小遣いで買いました。すぐに枯らしてしまいましたが、心に残る出会いです。大人になり、いつの日か仕事をしながら植物を育てたいと夢を抱き、縁あり昨年軽井沢に移住しました。私が働く「ほっちのロッヂ」がある発地の林には豊かな植生があり、幼い頃は気づかなかった山野草が持つ繊細さと力強さを知りました。ほっちのロッヂには「草部（くさぶ）」という草花が好きな人の集まりがあり、こどもたちが在来種を身近に学べる林を育てていきたいと思っています。われもこうの会では、野原での作業から沢山のことを教わります。野の花の見守り方、こどもと遊べる草花のこと。幼い頃をなぞるように、土や草の高さで作業をすると、清々しい気持ちになります。新しく軽井沢に来て、好きな

な中、日本に自生する茜は色素含有量は少ないものの堅牢度の良い染料なので、残念至極です。

現在私が作品制作に使っている茜は西洋茜とインド茜で染料店から購入しています。同じ茜科ながら日本茜は四つ葉、西洋・インド茜は六つ葉で、さらに西洋とインドでは種類が違うのか育てる土地が違うせいか色味が違うので、使い分けています。日本茜は使ったことがない（使おうと思ったこともなかった）ので色味の違いはわかりません。

ところがなんと我が家の庭の片隅に、茜と思しき草が生えているではありませんか！「思しき」というのはまだ精査していないからです。試しに染めてみるべきか、いやいやどの道実用的ではない、という思いを行ったり来たりして早数年が経ってしまいました。

植物染料を自前で供給する場合、一番のネックは採取時期があるということです。茜の場合は葉が枯れた秋から冬にかけてその根を掘り起こして煎じるのですが、生のままと乾燥させたものとでは染め上がりが違ってくるとか。そんなこんなでなかなか実現しない私の茜染。今年は頑張ってみようかしら。

この度植物染について書いてみないかとのお話しがありましたので、軽井沢に自生しながらあまり知られていない（と思うのですが）日本茜についてまとめてみました。今後も「われもこうの会HP」で植物染めへの私の思いと僅かばかりの知識をお披露目したいと思っております。

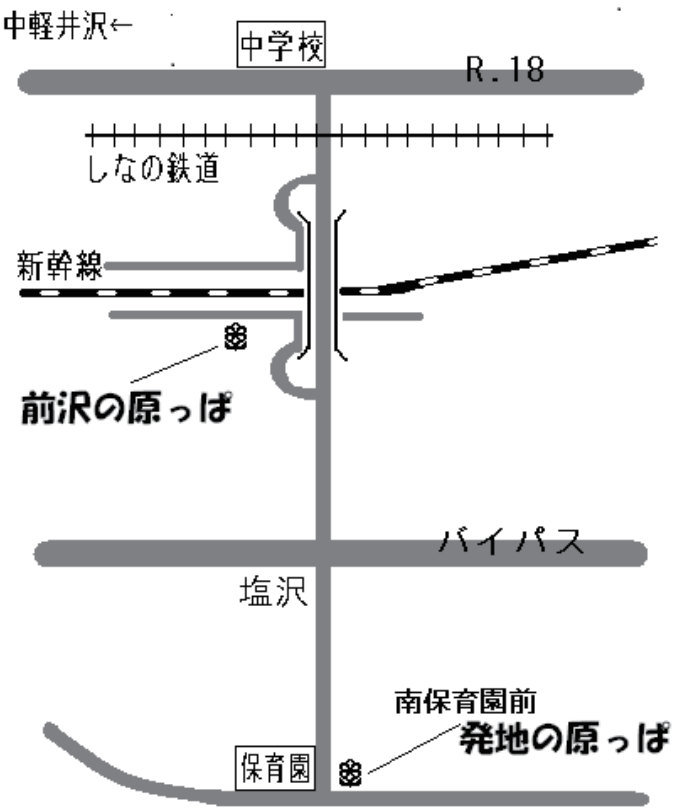
アカネ

アカネ科、アカネ属
学名：Rubia akane
英名：いくつかあるが、そのひとつが「Akane」

- 本州、四国、九州の山野に自生
- 日本、朝鮮半島、中国、台湾に分布
- つる性多年草
- 茎断面は四角、茎および葉周辺部に小さいトゲ
- 葉はハート形で、4枚ずつ節から出ている（ように見える）
- 秋に淡い緑白色の小さい花
- 果実は球形黒色
- 根は赤黄色
- 根を乾燥させたものが生薬の「茜草根（せんそうこん）」
- 「西」の夕焼け色の「草」で「茜」

◇◇◇

２０２１年も原っぱで会いましょう！



作業日は、

飛び入り参加大歓迎！

梅雨時は山野草の苗の交換会、
秋は種の収穫（持ち帰り可）などを
予定しております。

今年の作業日

5月	9日(日)
	19日(水)
6月	6日(日)
	16日(水)
	27日(日)
7月	7日(水)
	18日(日)
	28日(水)
8月	1日(日)
	25日(水)
9月	12日(日)
	29日(水)
10月	10日(日)
	20日(水)
11月	7日(日)

コロナの感染状況などにより中止・変更することもあります

★日曜日は

発地の原っぱ

★水曜日は

前沢の原っぱ

午後1時30分集合

▶雨天中止

小雨の場合決行することもあります

▶持ち物

園芸用手袋
スコップや草刈り鎌
日除けの帽子、長靴
水筒（熱中症予防に）

◆◇◆ 会 員 募 集 中 ◆◇◆

入会ご希望の方、見学お待ちしております！

年会費　1,000円

ご家族で入会する場合、2人めから500円

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

編集後記：　新型コロナウィルスの猛威、収まる気配が見られません。世界の感染者数が１億人を超え、国内でも感染リスクの高い変異株が蔓延しつつあります。東京オリンピックも延期され、聖火リレーは行われましたが、開催は不透明です。このような状況下、「避密」対策を昨年よりも、より一層厳しくして会報誌を制作しました。昨年の編集後記でも書いた「正常な作業にもどれることを願うばかりです。」で締めくくるのは、今年で最後にしたいものです。

発行/われもこうの会　tel.090-4442-4387　http://waremokou.whitesnow.jp/waremokou3/